

停電の部屋に灯されたロウソクの火が、すき間風の勢いで消えそうになりながら、天井に篤彦たちの黒い影を作っていた。自分たちのものだとかわっているのに不気味だった。

篤彦は、鬼の姿をした風神が、空の上から一つひとつの家に猛攻をかけているよ
うな気がした。風の勢いが弱まったとき、腕を休められると期待したが、裏の見回りに行った叔父に大声で呼ばれた。「台所がぶつりよるきに、バケツを交換しよれ」座
っている間はなかった。風はまた激しくなり、台風との格闘は明け方近くまで続い
た。長い時間に思えたが、篤彦には大人と一緒にになって母屋を守ったのだというさ
さやかな充足感があった。

翌朝、叔父夫婦は畑の農作物を見に行き、好恵もぎおんに急いだ。篤彦はタケシ
を誘って守の家に出かけた。大通りを祇園橋に向かっていると、駅の近くまで来た
だけで水の音が聞こえてきた。橋の上で大水の財田川を眺めていた守は「ゴツツイ
のお、こんなん初めてや」と声を高ぶらせている。「目がまいそうじゃ」タケシは空
を見上げた。

篤彦は、地響きのような音とともにうねり押しよせる濁流に立ちくらみ、その場
にしゃがみ込んだ。茶褐色に盛り上がった濁流は、見なれていた中央の砂洲を飲み
こみ、兩岸の土手道の際までいっばいに川幅を広げている。

「財田川、こなに広がったんか」

篤彦は、見知らぬ姿をあらわした川に心を奪われ、ひとりごとをもらした。

茶色の水煙が川全体をおおい、上流のかなたの霞んだ対岸に千田堤が小さく見
えた。

「あの辺の田んぼは流されとらん。やっぱり千田数馬は偉かったんじやのお」

守が二人に同意を求めると言った。

いつも通る土手に目をやると、竹やぶはひとかたまりになって傾き、土手の下の竜夫はんの小屋も、対岸の千田堤の辺りに見えていた水車も跡形もなく消えていた。

橋のたもとに現れた守の父と兄が、「危ないけん早う戻れ」と何度も手招きした。

三人が土手のほうに引き返そうとしたとき、一本丸ごとの樹が大きな枝葉を泥水に洗われながら近づいてくるのが見えた。岸ぞいのゆるい流れの中をゆっくり漂うように動いている。橋のあたりに来ると水音にまじり、動物の鳴き声のようなものが聞こえた。目をこらすと枝葉の間に白く動くものが見える。

「あ、山羊みたいなぞ」「生きとるんか！」

山羊は、つながれていた紐が幹に絡まり、体が枝葉の間に引っかけたまま、濁流の中を流されてきたのだ。人の姿に反応したのか、首を上げながら必死で泣き叫んでいる。土手から四、五メートル、木は浮き沈みしながらゆっくり流されているのだが、大人も子どももなすすべもなく目で追っているだけだ。

木が橋の下に流されてきたとき、守の兄が父親に問いかけた。

「橋の上から引っ張りあげられんじやろか」

「やってみるか。子どもは近づくなよ」

小走りで橋の上に向かう二人に、守たちはついていった。幹は思ったより太く、流れに洗われて竹竿の先のようになった大きな根が橋桁につかえて引っかけた。

守の父は山羊をつかもうと橋の上に腹ばいになったまま右腕を伸ばした。欄干から体を取り出し大声で指示する守の兄に、篤彦たちも声を合わせた。

「もっと右じゃ、違う違う、もっと手前じゃ」

だが、腕は山羊には届きそうにない。

「クソツ、ワシの足を強く抑えとってくれ」

守の父は右腕を引っ込めると、橋桁から頭を突き出し、両手を伸ばした。

そのとき、橋桁にひっかかって止まっていた樹の根がギリッギリッと奇妙な音をたてた。幹や枝が橋桁のへりの泥をこすりながら、また流れ始めようとしているのだ。

「父ちゃん、アブナイ！」山羊、も一駄目じゃ」

篤彦たちは口々にわめきながら、反対側の欄干のほうに走った。橋の下をくぐりぬけた樹が濁流の間に浮いたとき、枝葉の間にぼろ雑巾のようにひっかかった山羊が見えた。薄茶色にかすむ水しぶきの中を、その流木は浮き沈みながら流されていった。篤彦たちは黙っていつまでも下流を眺めていた。

午後になると残暑がぶりかえし、澄んだ大気の中に陽光がくまなく溢れわたった。篤彦は、久しぶりにお堂の裏の小径に足を向けた。ぎおんを通り過ぎるとき、生け垣の間から庭をのぞき込むと夕希ちゃんの姿が見えた。前より一層色が白く透けたようになり、ひどくやつれた姿でぼんやりと芙蓉を見ていた。

「あそこにいるのは、ほんとうにぼくのよく知っている夕希ちゃんなのだろうか」前みたいに会うのが難しいことだけが確かなことに思われた。そのとき、女将さんの声がした。奥に姿を消すとき、眼があったようにも微笑んだようにも思えた。篤彦は取り残されたような寂しさを感じ、そこを離れた。

土塀と石垣の間を抜けると、傾いたポンプ小屋と竹やぶが目に入った。土手上

がると、濁流の引いた後の川原が、白っぽくよそよそしく輝いている。竹やぶの下
の坂は途中で流し去られ、新しい流れがセンダンの樹の根本を洗っている。その木で
蝉が激しく鳴いている。

台風はいろいろなものを奪い去っていた。

目の前にあった及川への道、小さな番小屋、濁流に吞まれた山羊、祖父のくれた
ゴム草履、篤彦の脳裏に一つひとつの風景の中にいた、そのときどきの自分がよみ
がえった。

「生きとるもんはいつぞは死なんならん」

どこかから、栄三郎の声が聞こえてくる。終わろうとしている夏に強い愛惜を抱
えたまま、篤彦は土手の坂道を降りた。

お荒神さんのひろばまで戻ると、近所の大人たちが強風で地面に散在した椋の枝
葉や、飛び散った瓦を取り除く作業をはじめている。その中で、竜夫はんの噂話
が耳に入った。

「誰も姿を見たもんおらんのじゃが、小屋と一緒に流されたんじゃあるまいかの
お」

はじめて聞く話に驚いたが、篤彦にはあの竜夫はんが川で命を落としたとはど
うしても思えなかった。

「馬鹿なこと言うな、あの男は洪水にも溺れやせんだろう。気まぐれ男のこっち
や、どこぞで元気に生きとらいの」

「そーよ、どこぞでのお。ぎおんの若い娘も、またどこぞで生きていくんじやろな
あ」

大人たちの言葉は、篤彦の胸を少し開いた。

「来年らいねんの夏なつには、きっとまた葉子よっこに会あえるだろう……」

二人ふたりで聞きいた樹液じゆえきの音おとが、耳みみの奥おくで響ひびいてくるようだった。

(以上10月31日放送分)